

## 司馬光『資治通鑑』史料編纂方針

張紹好

公元前 450 年左右，晉國豫讓為了報答主君智伯的知遇之恩，圖謀暗殺趙襄子。在『戰國策』、『呂氏春秋』等先秦史料中也都記載著此事。司馬遷依據『戰國策』中的「晉策」之文，將此事件編入了『史記』中「刺客列傳」裡。

豫讓為晉人，原本投靠於范氏，中行氏但不甚得意，轉而投靠智伯，深受智伯的器重，後智伯伐趙襄子，趙襄子聯合韓，魏滅了智伯三分其地，因而豫讓視趙襄子為不共戴天的仇敵，決心要殺趙襄子報仇，替智伯討回公道。

豫讓決心替智伯報仇的最大原因是感於智伯對自己的尊重，知己，也就是中國所說的「士為知己死」的價值觀。豫讓潛入趙襄子的宮邸，準備暗中刺殺他，不幸被發現遭到逮捕，趙襄子佩服豫讓的忠義，釋放了他。可是豫讓沒有死心，以漆塗身改變容顏，伺機再度行刺趙襄子，他的朋友勸他不如投靠趙襄子，尋求適當的時機替智伯報仇也不失為一個可行的好方法，但豫讓回答說：「為人臣不可事二君」，當第二次的暗殺行動也失敗被俘時，趙襄子問豫讓，你曾事范氏與中行氏，並未為了他們而復仇，為什麼固執地一定要替智伯報仇呢？豫讓說：范氏和中行氏只把我當作是普通人對待，而智伯不同，他知我，待我如上賓，非常禮遇我，趙襄子隨後告知豫讓此次無法再寬宥他的行刺之罪。豫讓說趙襄子是個明君，懇請賜衣刺之，成全他替智伯報仇的宿願後，自刎而死。

司馬光根據司馬遷『史記』中記載的豫讓傳，簡化其內容收錄到『資治通鑑』中，也就是說簡單的記載著豫讓為替智伯報仇，潛入宮中被捕，襄子感佩他的忠義放了他，其後他改變姿容打算再次行刺，友人勸他投靠襄子伺機行動，但豫讓認為，為人臣不能有二心侍主，終因再次行刺失敗而遭到殺身之禍。

『通鑑』中的豫讓事件，看起來僅僅是縮簡了『史記』「刺客列傳」，內容沒有太大的不同，但仔細看的話還是有很大的不同。其一是『通鑑』中縮簡了「士為

知己者死」報仇決心の理由。其二是再度暗殺失敗被捕時、豫讓和趙襄子の對話完全沒記載。一般的讀者以為刺客列傳中絕不可忽視的關鍵性詞句是「士為知己者死」，但司馬遷在編纂『資治通鑑』時將此句刪除，沒有記錄進去，這是什麼緣故呢？我認為「士為知己者死」這句話聽起來使人感動，但仔細推敲其內涵，會發現此句還有另一個意思，也就是說士，不為不知己者死，既然臣下可以不為不知己者死，若他覺得其主君對他很不好的話，很有可能批評或攻擊自己的主君，這樣一來將會造成社會秩序的不安。司馬光以為「士為知己者死」有可能遭到誤解，引起無謂的社會問題，故而在『通鑑』中刪除此句也並非不可能吧！

## 司馬光『資治通鑑』の史料採択方針

張紹好

紀元前四五〇年頃、晋國で豫讓が主君智伯への報恩の為に、趙襄子を暗殺しようとした事件があった。このことは『戦国策』や『呂氏春秋』など先秦の史書に記されている。司馬遷は『戦国策』『晋策』の文を採って、『史記』『刺客列伝』中の「豫讓伝」とした。その概略は以下のとおりである。

豫讓は范氏と中行氏に仕えたが不満で、智伯に仕えた。智伯が韓、魏、趙の三氏に滅ぼされると、豫讓は最大の仇を趙襄子と定め、その命をねらった。智伯の為に仇を討とうと決心した理由は、「士は己れを知る者の為に死す」と考えたからであった。豫讓は趙襄子の宮中にしのび込み襄子を殺そうとするが発見され、捕えられてしまう。襄子は豫讓を義士であると認め、釈放する。豫讓は漆を塗って肌をただれさせ人知れぬ姿となり、再度、趙襄子をねらう。友人は趙襄子の家臣となってからその命を狙えばいいと勧めるが、豫讓は臣下として二心を抱いて仕えることはしないと答える。

再度の暗殺計画も失敗し、捕えられた豫讓は趙襄子と問答を交わす。趙襄子が「范氏と中行氏のためには仇を討とうとしなかったのに、なぜ智伯の為に執拗に仇を討とうとするのか」と問うたのに対し、豫讓は「范氏と中行氏は自

分を一般人として遇したのに対し、智伯は国士として待遇してくれた。だから、智伯に対しては国士として報いるのだ。」と答える。この後、趙襄子はもう許さないと告げる。豫譲は明主が人の美点を隠さないものであり、趙襄子が明主であることを述べた後、襄子の服をもらい受け、それを切って、仇を討ったことにして、自殺した。

司馬光は司馬遷の『史記』に載せる豫譲伝に拠って、この事件を簡略化して『資治通鑑』に記している。そこには、豫譲が智伯の為に仇を討とうとして宮中に入って捕えられたこと、襄子が豫譲を忠義の士だと認め、釈放したこと、姿を変えて再度暗殺を実行しようとする豫譲に、友人は趙襄子の臣下になってから襄子を殺せば容易だと勧めたこと、それに対して豫譲が二心を抱いて仕えることのできないことをのべたこと、そして再度の暗殺が失敗し、殺されたことを記している。

『通鑑』の文は、ただ『史記』の「刺客伝」を簡略化しただけで、内容に大きな違いはないように見える、しかし細かくみてみると大きな違いのあることがわかる。まず第一に、『通鑑』は「士は己れを知る者の為に死す」という仇を討とうと決心した理由を省いている。第二に、再度の暗殺計画も失敗し捕えられた時、豫譲が襄子と交わしたことばを全て除いている。つまり、「范氏と中行氏は、自分を一般人として遇しただけだったから一般人として対応し、智伯は自分を認め国士として遇したから国士として報いた」という語を省いているのである。これは一体何を意味しているのか。

『史記』「刺客列伝」を読んで人が感動するのは、一般的には「士は己れを知る者の為に死す」、つまり「自分を理解してくれた者の為には命をも投げ出す」という熱情に対してである。この熱情に感銘を受けたから、趙国の志士達は皆涙を流したし、今の読者も感動するのである。しかし、『呂氏春秋』「季冬紀 不侵篇」では豫譲が「范氏と中行氏が自分を冷遇し、一般人としてしか処遇しなかったのに対し、智氏は自分を特別待遇し、国士として遇してくれたから、国士として智氏に報いるのだ」、と答えたのに対し、「豫譲は国士である。それでもやはり人が自分をどう思い待遇したかを問題とする。まして普通人の場合はなお

さらである。」と述べ、豫讓の行為の底に待遇の如何によって対応を変える姿勢のあったことを指摘している。この指摘の意味することはどういうことか？

これは、次のように理解するのが妥当であろう。

「士は己れを知る者の為に死す」ということは君主に対して如何なる時にも絶対的忠誠を尽くすものとは限らない。君主に対して二心を抱かないのは、絶対的忠誠につながるものであるけれども「己れを知る者の為に死す」という生き方は、「己れを知ってくれないものの為には命を投げ出すことはない。」ということでもあり、自分の判断によって態度を自由に変えられるということである。それは更に君主が自分に対して理不尽な仕打ちをすれば、抵抗し、反撃する可能性もあるということである。このような自由な考え方は人の上に立ち統治して、秩序を守ろうとする者にとって都合のよいものではない。二心を抱かず、忠誠を尽くす者こそがよいのである。司馬光が「士は己れを知る者の為に死す」という語を削除したのは、司馬光にとって当然のことであった。『資治通鑑』は「治に資する」為の歴史書であったからである。

司馬光が原史料にあった「士は己れを知る者の為に死す」という語を意図的に削ったと思われる記事は他にもある。紀元前 397 年 3 月の条に聶政が韓の宰相俠累を殺した事を記す。これは『史記』『刺客伝』の聶政伝を簡略化したものであるが、『史記』にあった聶政の姉の言葉の中にあった「士は固より己を知る者の為に死す」という語を削除している。これも、前述の理由と同じく秩序を乱すことに連なると考えて消したものと思われる。

司馬光は正史その他多くの史料を用いて、『通鑑』を編修した。その記事はすべての根拠とした史料があり、創作したものはない。まことに信史である。しかし、司馬光は史料を採択する際に、己れの価値観によって、統治に益がないと判断した場合には、どんなに感動的なものであっても削除したのである。『通鑑』を読む際には、原史料がどのようなものであったか、確認する必要があると思わせる例である。

本研究は、司馬光がなぜ史料を採択しなかったかを述べている資料を加え、更に充実した形で発表したいと考えている。